

出エジプト記27章「祭壇と外庭」

1A 青銅の祭壇 1-8

2A 幕屋の庭 9-19

1B 掛け幕 9-15

2B 庭の門 16-19

3A 燭台の灯 20-21

本文

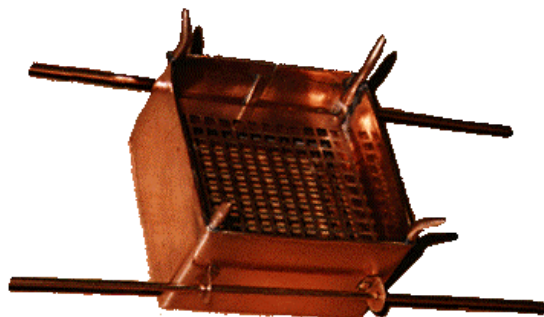
出エジプト記27章に入ります。私たちは、神の幕屋を主がモーセに示しているところを読んでいきます。神の幕屋が、神のご計画全体の中で本当に大切な、中心的な部分を占めていることを初めに、お話しさせていただきました。それは、神が私たちと共に住むという御心を示しており、アダムが罪を犯した時以来、失われてしまった霊的祝福を、神がいかに取り戻し、回復して下さるかを物語っている話をさせていただきました。エデンの園がある意味、神の住まわれるところ、神の家であります。そこから人が離れて、神は犠牲のいけにえによって、それが祭壇に捧げられることによって、人が神に近づくことができるようにしてくださいました。そして、モーセに幕屋を示されて、イスラエルが宿営の真ん中に主が住まわれることを可能にしたのです。ソロモンの時代には、その住まいがエルサレムに定められ、その神殿にご自身の名を置くことを決められました。そして、幕屋そのものであられるキリストご自身が来られました。この方が肉体を取られることによって、神が共に住まわれることが実体化したのです。そして、主が天に昇られた後も、聖霊によって私たちの間に住まれて、そして再臨された後は再びご自身が住まわれる神殿をお建てになり、千年の間、統治されます。そして、新しい天と新しい地に造り変えられ、天から降りて来るエルサレムは、至聖所そのものを示していたこともお話ししました。

そして、主は、ご自身が住まわれる御座そのものを表す、契約の箱とその上の宥めの蓋からモーセに示し始められました。その箱には十戒の板が納められ、蓋は大祭司が携える血を振りかけられることによって、神の御怒りが宥められることを示していました。そして臨在のパンの机と、燭台が、聖所に置かれることを見ました。ここはいわば、祭司たちが主のご臨在のところで仕えるところであり、私たちが、キリストの命にある神との交わりを、天に触れるような交わりを示しています。しかし、そこは幕屋で覆われていることを私たちは前の章で学びました。その幕は四枚もあり、内側の幕は、亜麻布と青、緋色、紫色の撚糸でおられて、ケルビムもおり込められていることを見ました。これらすべてが、キリストのご性質と御業を示していました。そして、それは金で覆われた板で壁が造られて、聖所と至聖所を構成しています。さらには、至聖所と聖所を仕切る垂れ幕があることを見ました。そして聖所の入口になっている幕も見ました。

そして今晚は、その外側にあるものを神がモーセに示されます。一つは、最も中心的な祭具である、青銅の祭壇です。そして次に、外庭の掛け幕について見ていきます。

1A 青銅の祭壇 1-8

1 祭壇をアカシヤ材で作る。その祭壇は長さ五キュビト、幅五キュビトの正方形とし、高さは三キュビトとする。2 その四隅の上に角を作る。その角は祭壇から出ているようにし、青銅をその祭壇にかぶせる。3 灰壺、十能、鉢、肉刺し、火皿を作る。祭壇の用具はみな青銅で作る。4 祭壇のために青銅の網細工の格子を作る。その網の上の四隅に青銅の環を四個作る。5 その網を下の方、祭壇の張り出した部分の下に取り付け、これが祭壇の高さの半ばに達するようにする。6 祭壇のために棒を、アカシヤ材の棒を作り、それらに青銅をかぶせる。7 それらの棒は環に通す。祭壇が担がれるとき、棒が祭壇の両側にあるようにする。8 祭壇は、板で、中が空洞になるように作る。山であなたに示されたとおりに作らなければならない。



イスラエルの民にとって、また祭司にとっても、幕屋において最も活動が盛んなところと言えば、まさしくこの祭壇であります。幕屋の入口から入るとすぐに祭壇があり、そこで火による捧げ物をささげます。私たちはこれまで、アベルの時から全焼のいけにえによる、神への礼拝を読んできました。ノアもささげ、アブラハム、イサク、ヤコブもささげ、そして今、主がイスラエルの民に祭壇によって、恒常的にご自分にささげる祭壇を設けられたのです。レビ記における、祭司の奉仕の務めは、火による献げ物であり、それらはすべて祭壇の上で行われるものです。

これからずっと見ていきますが、祭壇における儀式は残酷であります。動物がほふられ、その血を四隅の角につけたり、回りに注いだり、そしてその体を祭壇の上で焼きます。その解体の姿を見れば、私たちが考えるような礼拝の姿、つまり穏やかで、まとまりのある、ほんわかしたような雰囲気はまったくありません。そこには、流血と燃える火の固まりがあります。祭壇というのはヘブル語で基本的に、「いけにえを屠る」という意味があります。ここに、私たちが罪を犯せばどのようなことになるのかの現実があります。主がアダムとエバが罪を犯した後、その裸体に動物の皮によって衣を着せてあげましたが、彼らの罪を覆うために必要だったのは、動物の命の犠牲だったのです。この重たい事実が、罪を犯すということに付きまとっているのです。

ローマ 6 章 23 節に、「罪の報酬は死です。」とあります。日本語の言い回しで、「水に流す」というものがありますが、悪や罪は水に流す程度のもことによって取り去られるものではないのです。まさに血を流さなければいけないのです。「ヘブ 9:22 血を流すことがなければ、罪の赦しはありません。」とあります。それによって、私たちを造られた神に立ち戻ることができる救いとなります。私た

ちの感覚では測り知れないほどの深い癒し、根っこから心を変えてくれる神の霊の働きがあるのは、罪から来る死を身代わりの死によって赦す、という残酷で、極めて深刻な方法を取っているからです。そして動物をバーベキューのようにして焼くのは、その火が神の裁きの火を表しているからです。「私たちの神は焼き尽くす火です。(ヘブル 12:29)」「しかし、臆病な者、不信仰な者、忌まわしい者、人を殺す者、淫らなことを行う者、魔術を行う者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者たちが受ける分は、火と硫黄の燃える池の中にある。これが第二の死である。(黙示 21:8)」

祭壇は、契約の箱や臨在のパンの机、板などと同じように、アカシヤ材で作られています。アカシヤ材は、とても堅いもので、腐ることも朽ちることもないもの、また乾燥した荒野においても育つことのできる堅固な姿を示しています。彼らが荒野の旅をしたパランの荒野に行きますと、今でもたくさん生えているのを見ることができます。それが、心を頑なにする人間の世界に来られて、地上での生涯を全うされたイエス様の姿を示しています。それを青銅で覆うのです。青銅は、すべての金属の中で最も火に強いと言われています。祭壇は火によるいけにえを献げるところですから、その火に耐えるものでなければいけません。そして青銅は、掛け幕の柱の台座としても使われ、外庭で使われる金属の代表的なものです。

改めて青銅の意味しているところを考えてみましょう。イスラエルの民が荒野の旅をしている時に、不平を鳴らしました。それで主が御怒りを、燃える蛇によって表されました。人々が噛まれて死んでいきましたが、自分たちが神にもモーセにも罪を犯したことを告白します。そこで主は、モーセに青銅によって蛇を作り、それを旗竿につけるように命じられます。モーセはその通りにしました、そしてその蛇を見たことが生きました。この出来事をイエス様が、ニコデモと話しておられる時に語られました。「ヨハ 3:14 モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければなりません。」これはイエス様が十字架に付けられてあげられることを意味しています。キリストは、蛇の子孫の頭を砕く方として現れることを神は約束されました(創 3:15)。ですから、蛇が木の上で青銅で作られているのは、悪魔の脳天を神の裁きによって打ち砕くことに他なりません。神が裁かれていることを示しています。

そして寸法ですが、「長さ五キュビト、幅五キュビトの正方形とし、高さは三キュビトとする。」となっています。大体、長さ幅が 2.3 寸の正方形になっていて、高さは 1.4 寸です。私たちは前回、五という数字が聖所の中でも数多く出て来て、五は人間の責任を示めしているのではないか？という話をしました。五千人の給食の時に、「人々は、百人ずつ、あるいは五十人ずつまとまって座った。」とあります(マルコ 6:28,40)。そして三という数字も多くでてきますが、三日目にイエス様が甦られたのもそうですし、主が三度、サムエルを呼ばれて、サムエルが召しに応答するところとか、神の確かな証しを示しています。神ご自身が三位一体の方ですし、三度の祝福の言葉もそれに当たるでしょう。そして青銅の四隅の「四」の数字も大事である話もしました。ケルビムの姿は、エゼキエル 1 章では四つの生き物として出て来て、それぞれが四つの顔を持っています。取り囲ん

でいるというような意味合い、あらゆる方に広がっているという意味合いがあるでしょう。福音書は四つあります。そこには、全ての人々に開かれている救いが示されているのでしょう、

そして祭壇の四隅には角があります、力や救いを表しています。救いの角という言葉が聖書に出て来ます。ヨアブが、ソロモン王から逃げていた時に彼は角を掴んだとあります（I 列王 2:28）。彼は自分の命の救いを求めたのです。その角に指で血を塗る儀式もあり、レビ記で「罪のためのいけにえ」でそれを行います。血によって、人々の罪を取り除いて、罪の赦しを与えます。神が力をもって、私たちを贖ってくださいます。



そして、3 節に、「灰壺、十能、鉢、肉刺し、火皿を作る。祭壇の用具はみな青銅で作る。」とあります。興味深いことに、これも五つの用具になっています。「鉢」はいけにえの血をその中に入れて持ち運ぶためのものです。次に、「灰壺」は、灰を宿営の外の子よい所に持ち出すためのものです。罪のためのいけにえは、宿営の外に灰を持って行かなければいけません。それが、キリストがエルサレムの城壁の外で十字架にかけられたことを示唆します。「火皿」は、熱い炭火を運ぶものです。イザヤが天の幻を見て、自分は災いだと叫んだ時に、セラフィムが火ばさみをとってその燃えている炭火を彼の唇に当てました(6:6-7)。その火ばさみも、火皿と同じ役割を果たし、熱い炭火を運ぶためのものです。そして、「十能」と「肉刺し」は、いけにえを焼き尽くすための器具であり、神のみこころを全うするための大事な働きを担っています。

そして祭壇は、契約の箱や臨在のパンの机と同じように、担ぐための棒があります。これは、主のために清められ、捧げられているので、それに触れては基本、いけないからです。

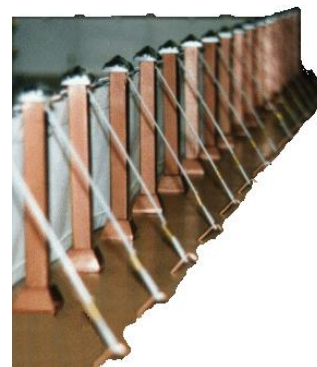
¹ <http://meigata-bokushin.secret.jp/index.php?%E9%9D%92%E9%8A%85%E3%81%AE%E7%A5%AD%E5%A3%87>

2A 幕屋の庭 9-19

では次に、幕屋の庭に行きましょう。

1B 掛け幕 9-15

9 次に幕屋の庭を造る。南側は、撚り糸で織った長さ百キュビトの亜麻布の庭の掛け幕を、その側に張る。10 その柱は二十本、その台座は二十個で青銅、その柱の鉤と頭つなぎは銀とする。11 同じように、北側も長さ百キュビトの掛け幕とする。その柱は二十本、その台座は二十個で青銅、その柱の鉤と頭つなぎは銀とする。12 また、庭の西側は幅五十キュビトの掛け幕、その柱は十本、その台座は十個とする。



聖所をこの掛け幕によって取り囲みます。長さとは幅は二対一です。長さは約44メートル、幅は22メートルです。そして数字として、五十と、五十かける二で百というのは意味があるでしょう。五千人の給食で、組にならせたのは、「百人ずつ、あるいは五十人ずつまとまって」とあるからです。このようにして囲うことによって、どこからでも人が中に入ることができないようにしています。後で見る、東向きの門になっている、幕を通してでなければ入れません。

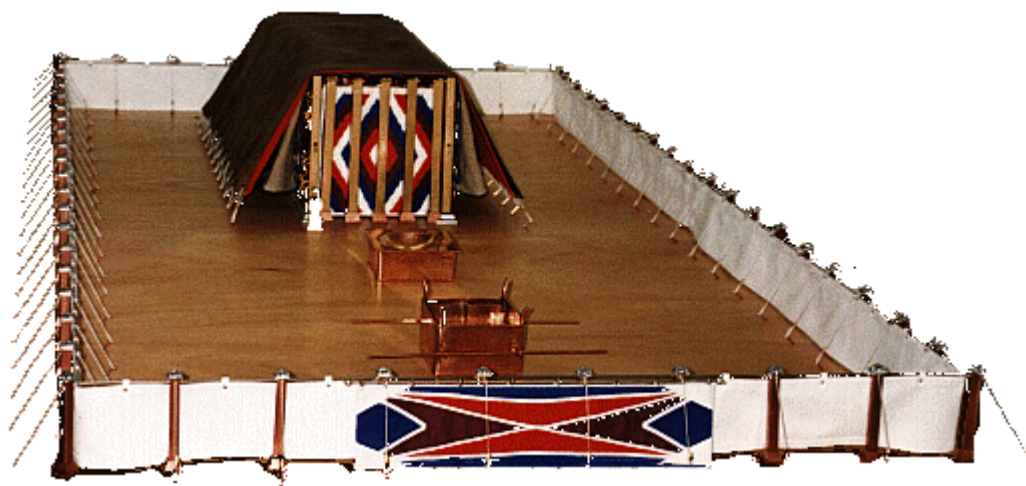
「亜麻布」の白は正しさや清さを表しています。これは、私たちの主イエスが、何の汚れもない義なる方であることを示しています。主のような義がなければ、だれも父なる神のところに入ることはできないのです。イエス様は、もうひとりの助け主、御霊が来られると、世の過ちを明らかにされると言われました。罪について、義について、そしてさばきについて、明らかにするとのことです。「ヨハ 16:10 義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです。」と言われました。つまり、イエス様のような義でなければ、天において受け入れられる正しさではないということです。ですから、イエス様抜きで神の前に義を立てようとしても、所詮、無理だということです。私たちは、いつもイエス様の正しさを見て、自分がいかに足りない人間なのか、汚れているのかを悟って、初めて福音を知ることができます。

そして、この掛け幕を支えているのは、柱です。聖所の板と同じように台座で柱を支えます。台座も青銅で作ります。地面に接触しているところは、聖所においては銀でした。銀は、人が贖いのために宮に納める時、銀貨でなければいけなかったのですが、贖いを示しています。がなければいけないということを説明しました。そしてここでは、台座は青銅となっています。つまり、神の裁きがあるということです。幕屋の中に入ろうとするものなら、イエス様の聖さと正しさで神の裁きがあるとうことです。けれども、柱の鉤と頭つなぎは銀です。そうです、イエス様の正しさはご自身が、私たちの罪の贖いのために死なれるところで現れます。

そして東向きに入口があるのですが、その入口のみしか聖所には近づくことができません。ここ

に、私たちが神について、救いについて考えなければいけないことがあります。それは、「すべての道は神に通じる」のではない、ということです。多くの人々が、仏教でもキリスト教でも、イスラム教でも、結局、同じものを信じているのだ。または、良いことを行っている人であれば神に到達できる、と思っているのです。けれども、それはあたかも亜麻布の掛け幕から中に侵入してもよい、と言っているようなものです。そうすれば、青銅の柱また台座が表している神の裁きによって滅んでしまうだけです。

13 正面の、庭の東側の幅も五十キュビト。14 門の片側には十五キュビトの掛け幕、その柱は三本、その台座は三個とする。15 もう片方の側も十五キュビトの掛け幕、その柱は三本、その台座は三個とする。



北と南は百キュビトで、西も東も五十キュビトですが、東側だけは次に出て来る、入口のための幕があるので、その左右に十五キュビトの掛け幕になっています。

2B 庭の門 16-19

16 庭の門には、青、紫、緋色の撚り糸、それに撚り糸で織った亜麻布を用いた、長さ二十キュビトの、刺繍した垂れ幕を張る。その柱は四本、その台座は四個とする。

庭の門には、この垂れ幕があります。これは、聖所の入口の幕、そして聖所と至聖所もそうでしたし、また聖所を覆う幕も同じ材質でした。青、紫、緋色の撚り糸で織った亜麻布です。聖所の幕や至聖所の垂れ幕にはケルビムが織り込まれていましたが、聖所の入口の幕と、ここの庭の幕には織り込まれていません。ケルビムは、主のおられる王座で仕えている天使長だからです。そしてこの青、紫、緋色にそれぞれ意味があったことを学びました。青は、主なる神がおられる天を表しています。天は聖なる神が住み、地は人の罪によって汚れたことを示しています。紫は、イエス様が紫の衣を着せられたように、王を示しています。そして、緋色は血潮が流されたことを示していま

す。天から来られたキリストが、ユダヤ人の王として来られたのに、血を流したということ、しかしその方には罪はなかったということ。その福音を示しています。その門を通過して、初めてイスラエル人は牛や羊のいけにえを携えて、祭壇のそばで祭司によってそのいけにえを屠ってもらえます。

そして、この門が、東向きになっていることがとても大事です。神殿においてもすべて、東向きの門から入り、西に直線に向って、祭壇、聖所、そして至聖所へと向かいます。イスラエル旅行に行った時に、当時のカナン人など異教徒の祭壇はその反対で、西側から東を向くかたちで礼拝をささげるのを知りました。なぜか？日の出る方向だからであると、正統派ユダヤ教徒の人から聞きました。太陽が出てくるので、それを神として崇めるために西から東に入るのですが、まことの神をあがめる時は、その反対方向を向いて、あえて「わたしは、主にお従います。」という行為を取るようさせたわけです。生きた信仰というのは、世の流れに逆らうようなものです。牧者チャック・スミスのお母さんは、かつて子供のチャックに対して、「死んだ魚は川の流れにしたがっていけけれども、流れに逆らうのは生きている証拠なのよ。」ということを話しました。

そのように、太陽神を拝む異教の儀式とは敢えて反対方向というのは、一つの妥当な理由でしょう。けれども、聖書で最もはっきりしているのは、「アダムとエバが、エデンの園の東から追放された」ということなのです。「創世 3:23-24 神である【主】は、人をエデンの園から追い出し、人が自分が取り出された大地を耕すようにされた。こうして神は人を追放し、いのちの木への道を守るために、ケルビムと、輪を描いて回る炎の剣をエデンの園の東に置かれた。」東から追放されたのです。したがって、神の住まわれるところに入るのは、いつも東の門から西へ動くことになるのです。ソロモンの神殿も東の門からで、エゼキエルの時代、神殿に偶像礼拝が行われていて、神はケルビムにあるご自身の栄光を、聖所から東に移し、ついに東の門から離れ、東にあるオリブの山からも離れていきました。

ですから、イエス様が福音書の中で、東の門からおそらくは入城され宮清めをされたこと、そしてオリブ山から天に昇られたのには意味があります。ゼカリヤ書 14 章には、主が戻って来られるのはオリブ山であることが書かれています。そしてエゼキエル 43 章によると、「43:4 【主】の栄光が東向きの門を通過して神殿に入って来た。」とあるのです。詩篇にも、「詩 24:7 門よおまえたちの頭を上げよ。永遠の戸よ上がれ。栄光の王が入って来られる。」との預言があります。

門というのは、神殿もそうですし、エルサレムの城もそうですし、外敵から中にいる人々を守るといふ大きな役目があります。聖書には、数多く門に対する思い入れがあります。ダビデはこう歌いました。「詩 84:10 まことにあなたの大庭にいる一日は千日にまさります。私は悪の天幕に住むよりは私の神の家の門口に立ちたいのです。」そこを通れば、主のおられるところに入れるからです。そして、主ご自身も人々が門を入られるのをこよなく愛されます。「87:2 【主】はシオンの門を愛される。ヤコブのどの住まいよりも。」そして、私たち礼拝者は、感謝と賛美をもって主のご臨在

の中に入ります。「100:4 感謝しつつ主の門に賛美しつつその大庭に入れ。主に感謝し御名をほめたたえよ。」

こうして見ると、イエス様が羊の門についてであります、「わたしが羊の門です」と言われたのは、大きな意味があります。「ヨハ 10:9 わたしは門です。だれでも、わたしを通過して入るなら救われます。また出たり入ったりして、牧草を見つけます。」そして、その門を通過して真っ直ぐにいくと、そこは至聖所、主の御座があるところです。その真っ直ぐな道を意識して、イエス様はピリポにこう語られたのでしょう。「14:6 わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。」私たちはいつも、どこに行くべきかの道を意識しています。そして道だけでなく、真理がどこにあるのか？ 真実はどこにあるのか？ ということも意識します。道と、真理のさらに奥には、命があります。道と真理と命、この順番は、主に近づく者も辿るものだと見て良いでしょう。

17 庭の周囲の柱はみな、銀の頭つなぎでつなぎ合わせ、その鉤は銀、台座は青銅とする。18 この庭は長さ百キュビト、幅五十キュビト、そして高さは撚り糸で織った亜麻布の幕の五キュビトとし、その台座は青銅とする。19 幕屋の奉仕に用いるすべての備品、すべての杭、庭のすべての杭は青銅とする。

これはまとめですが、新しい情報もあります。掛け幕の高さは五キュビトです。そして、杭についても書いてあって、それも青銅で作らなければいけないとあります。

3A 燭台の灯 20-21

こうして祭壇と外庭について見ました。次の二節は、祭司の務めに一気に話が移ります。聖所の中での話です。幕屋の構造を大まかに主は示されたので、今度は祭司自身の装束について示されるからです。その前に祭司の日毎の務めとして、灯を絶やさないと教えられます。

20 あなたはイスラエルの子らに命じて、ともしび用の質の良い純粋なオリーブ油を持って来させなさい。ともしびを絶えずともしておくためである。21 会見の天幕の中で、さとの板の前にある垂れ幕の外側で、アロンとその子らは、夕方から朝まで【主】の前にそのともしびを整える。これはイスラエルの子らが代々守るべき永遠の掟である。

聖所に入りますと左側に金の燭台がありましたね。それを祭司は、いつも絶やすことなく、灯を整えなければいけないという教えです。そこにある一切のものは、この光がなければ見ることができません。前々回、学びましたように、その光はキリストご自身の光であり、また私たちがその光の中で歩むことを表していました。そしてその光をともしぶことのできるのは、「油」であります。聖書には「油」が数多く出てきますが、神のために用いられる時には聖霊の働きを表しています。ゼカ

リヤ書4章で、ゼカリヤがオリーブの木から管が出ていて、燭台のともしび皿に油を供給している幻を見ました。それが意味するところは「わたしの霊」つまりご聖霊だったのです。聖霊が燭台の光、つまり神の聖さと正しさをもたらすことができます。

つまり、祭司たちの務めは、聖霊にいつも満たされることです。私たちは、光の子どもとして召されています。そしてその光は、聖霊に満たされることです。「エペ 5:18 また、ぶどう酒に酔っては いけません。そこには放蕩があるからです。むしろ、御霊に満たされなさい。」これは、一時期ではなく、絶えずです。私たちは、主に絶えず頼らなければ、その御霊に絶えず頼らなければ、たちまち暗くなってしまふ、暗いというのは性格のことではなく、世の不正や悪に自分も関わってしまうということです。